

演出から一言、ずっと同じ話しかしてないのでメモ、4

脱兎を追う、の稽古で話した話のコピペ。

最近稽古で思うこと。

最近、演出で何か言う場合と、何も言わない場合の差について考えた。基本、何も言わない時には、役者が台本に書いてあることをやっている時なのだと考えた。いや、そりゃ台本に書いてあることをみんなやってるよ。と思うかもしれないが、実はそうでもない。台本に書いてある台詞を使って、自己表現になってしまっている場合には問題が起こる場合が多い。

前にも書いたが、あくまで演じるのは他人、やるのは他己表現であって、そこに自己はいらない。台本や演出はそれを求めている。役者という仕事に自己表現はない。だから、ああ台本を使って台本には書かれていない（そこから想像できる範囲内ではない）自分の思いを乗っけちゃってるな、って場合には、観ていて違和感が生まれ、台本世界を体現は出来てない。役を掴み損ねているし、ちょっと変になってしまう。確かに台本に書かれていることには幅があり、広い。今回みたいにダブルキャストで稽古をしていると、この人がやっていることと、あの人がやっていることは違うけど、両方とも大丈夫ってことも多い。それは、どちらも台本の範囲内でやっているから問題がないのだ。

しかし、そんな広い幅の、その「外」はちゃんと存在する。その外に出てしまっただけでは、ダメのものはダメなのだ。ただの自己表現で、舞台演劇では失敗していることになる。

あらためて、自分の表現、一個一個の選択が、台本の範囲内か、外に出て行ってしまっていないか、検証してみても良いと思った。それと、ちょっと自分が失敗しても、どうせそれを自分が背負えばいいと思ってはいけない。観客は、作品全部で面白いのか、詰まらないかを決める。誰かが失敗していたら、その間の退屈は芝居全部に響く。ちょっとでも油断したら、観客はそこであくびをして、時計を気にする。その事は、繰り返しになるが、芝居全体の面白さに影響する。

あらためて、演劇をする危機感、演劇をする時の緊張感について意識を向けて欲しい。リラックスは大事だ、緊張は禁物、しかしその為には緊張感をずっと持っていないと行かない。

良い作品を作っていると実感している。観客に届けば、突き刺されば、この作品は誰かの人生を変える作品になるかも知れない。その為には、ずっと端から端まで面白続けなくてはならない。本番まで残り期間、焦らず、知的に、自分の状態に合わせ、知恵と労力を割いて、頑張っただけで欲しい。

One for all、一人はみんなの為に。

長堀博士、記